

Title	よろこびの経験
Sub Title	Experience of joy
Author	佐藤, 真基子(Sato, Makiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.120 (2008. 3) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	In his books, Augustine frequently refers to the statement that all of us want to be happy, which he read in Cicero's Hortensius when he was 19 years old. In his Confessions X, Augustine examines where and when we experienced the happy life, since he thinks we would not want to be happy unless we had some idea of happiness. He considers the happy life to be the joy all of us want to experience. We all have experienced joy in each life, and have the memory of it. Augustine thinks this memory can be the clue to attain the happy life. But, we do not always experience joy for good purpose. How can it be the clue to get the joy in the happy life. What we find joy in is various. Augustine notices what he find joy in has changed through his experiences. In this paper, I examine Augustine's description of his own joy in Conf., and clarify his view that what one finds joy in reflects the state of him, and that one can search and attain the happy life in good way when we experience joy with our neighbours.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000120-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

よろこびの経験

佐藤真基子*

Experience of Joy

Makiko Sato

In his books, Augustine frequently refers to the statement that all of us want to be happy, which he read in Cicero's *Hortensius* when he was 19 years old. In his *Confessions* X, Augustine examines where and when we experienced the happy life, since he thinks we would not want to be happy unless we had some idea of happiness. He considers the happy life to be the joy all of us want to experience. We all have experienced joy in each life, and have the memory of it. Augustine thinks this memory can be the clue to attain the happy life. But, we do not always experience joy for good purpose. How can it be the clue to get the joy in the happy life.

What we find joy in is various. Augustine notices what he find joy in has changed through his experiences. In this paper, I examine Augustine's description of his own joy in *Conf.*, and clarify his view that what one finds joy in reflects the state of him, and that one can search and attain the happy life in good way when we experience joy with our neighbours.

* 慶応義塾大学文学部非常勤講師（哲学）

幸福とよろこび

「われわれはみな幸福でありたいと望む」という考えについてアウグスティヌスは、回心直後にカッシキアクムで著した『アカデミア派論駁 (*Contra Academicos*)』(386年)以来、諸著作において繰り返し論じている¹。『告白 (*Confessiones*)』(397～401年)第X巻では、神を記憶の中に探求する議論において、自分は神を探求するときには幸福な生を探求しているとして、誰もが望む幸福な生がいかなる仕方で記憶の中にあるかを論じている。アウグスティヌスは次のように言う。

幸福な生とは、すべての人がそれを望み、まったく望まない人は誰もいないものではないか。そのように人は幸福な生を望むのであるが、どこでそれを知ったのだろうか。どこでそれを見て、愛するようになったのだろうか。(X, 20, 29)

人はみな幸福な生を望んでいる。今は望んでいるのであって、望んでいる当の幸福な生を生きているのではない。すなわち、幸福な生は今自らのもとにない²。今自分のもとにないものを、人はいかにして探し求めるのか。アウグスティヌスは上の引用より前の箇所、失くしたコインを探す場合を例に挙げて次のように説明している³。失くしたコインを探すとき、それは今自分のもとにない。しかし実物がないからといって探すための何

¹ プラトンに遡るこの考えを、アウグスティヌスはキケロの著作から学んだ。*De Trinitate* 13, 7 では、キケロの *Hortensius* の言葉としてこの考えを引用している。(Cf. Cicero, *Hortensius*, fr. 36 (Müller); *Tusculanae Quaestiones*, 5.38) アウグスティヌスはこの *Hortensius* を 19 歳の時に読み、強い影響を受けたと告白している。(Conf., III. 4, 7)

² Cf. 「充分です、ここにありますが、と言えるまで、幸福な生は私のもとにありません」(X, 20, 29)

³ X, 18, 27

の手がかりもないのではない。人はそれについての何らかの知をもとに実物を探す。その知を記憶しているからこそ、違うものが差し出されたときにはそれでないと分かり、見つけたときにはそれであると分かる。もしコインについてのいかなる知ももっていなければ、探そうとさえしないはずである。アウグスティヌスは幸福な生についても同様に、それについての何らかの知をもっているからこそ、人はそれを望むことができると考えている。とはいえ、コインの場合は、かつて自分のもとにあったときに見たり触ったりしてそれについての知を記憶したといえるが、誰もが望むという幸福な生は、かつて人生のあるときに実際に生きたことがあるのではない。ではいったい人は、幸福な生についてのいかなる知を記憶しているのか。これが、上の引用において提示された問いである。

この問いに対してアウグスティヌスは、人はよろこびを記憶しているような仕方で幸福な生を記憶しているとして、よろこびの記憶について次のように説明している。

私は自分が楽しかったときに、(私のよろこびを) 自分の心の中で経験しました。そしてその知 (notitia) が記憶にとどまりました。それで私は、自分がよろこんだと記憶していることがらそれぞれの多様さに応じて、ときには軽蔑をもって、またときには憧れをもって、そのよろこびを思い出すのです。(X, 21, 30)

よろこびは自らの内に生じるもので、外から感覚によって受け取られるのではない。その点で、コインを記憶する仕方とは異なる。とはいえ、経験したよろこびそのものを記憶しているのでもない。このことは、われわれがよろこびを思い出しても、じっさいに経験したときのよろこびそのものがよみがえって再びよろこぶのではなく、別の感情を抱きながらよろこびを思い出すことがある事実から言えることである。そうしたよろこびの

記憶のあり方が、上の引用で *notitia* と表現されていると思われる⁴。アウグスティヌスは、幸福な生も *notitia* というあり方において記憶しているとみなしているのであろうか。たしかに幸福な生も、外から感覚によって受け取られたものを記憶しているのではないし、アウグスティヌスが述べているように⁵、幸福な生を記憶しながら今はみじめな生を生きていることから、そのものを記憶しているのでもないといえる。その限りで、人はよろこびを記憶しているような仕方で幸福な生を記憶しているとみなしうる。しかしこのような記憶の仕方は、よろこびに限らず怒りや悲しみなど他の感情の記憶も同様である。しかも、記憶の仕方が同じという限りでは、経験したことのない幸福な生について、その記憶が何に由来するかは不明であり、人は幸福な生をどこで知ったのかという最初にアウグスティヌスが提示した問いに対する答えとはならない。かくして、幸福な生の記憶をよろこびの記憶と関係づけて論じるアウグスティヌスの意図は、別にあると予想される。じっさい、次のように考察が進められている。

ふたりの人に、兵士になりたいかとたずねる場合には、彼らのうち一人はなりたいたと答え、もう一人はなりたくないと答えるということになるかもしれません。しかし彼らに、幸福でありたいかとたずねる場合は、二人とも迷いなくただちに、そうありたいと言うはずで。自らが幸福であるためにこそ、一人は兵士になることを望み、一人は兵士になることを望みません。それはおそらく、各人別々のことでよろこぶからではないでしょうか。(X, 21, 31)

兵士になることは、誰もが望むのではない。しかし望む者も望まない者

⁴ 感覚によって受け取られるものの記憶は、*imago* と表現され、区別されている。

⁵ X, 21, 31

も、それを望んだり望まなかったりするのとは、「自らが幸福であるために」であると述べられている。人それぞれ生き方は違えども、生の目的が幸福に生きることにある点は共通であると考えられているのである。ここで、幸福という共通した目的をもちながらも生き方が異なることについて、「各人別々のことでよろこぶ」という説明が付与されていることに注目しよう。たしかに、兵士になることを望むとき、兵士になることによる喜びを見出す者がそれを望み、いかなるよろこびも見出さない者はそれを望まないということがあるだろう。仮に、兵士になることが一般に善い生き方であるとみなされているとしても、自らがよろこびを見出せない場合は、それを望まないこともある。とはいえ、そこによる喜びが見出されることがらばかりが望まれ、選択されるとは限らないであろう。兵士になることそのものによる喜びを見出さないとしても、祖国が守られることや、家族が安定して暮らせることなど、兵士になることによって実現されることがらを目的として、兵士になることを望む場合がある。しかしこの場合も、目的であることがらによる喜びが見出されていることによって、手段となる生き方が選択されていると考えられ、自らがよろこぶことが生の目的であるといえる。すなわち、幸福であることとよろこぶことは、誰もが生の目的としている点で一致している。アウグスティヌスは、幸福な生を生きすることはよろこぶことであると理解しており、このことから、このような仕方で両者が関係づけられていると思われる⁶。

⁶『告白』では、Luc. 15, 4-10 や Matth. 25, 21 (intra in gaudium domini tui) などよろこびについての言及を含んだ聖書の記述が念頭におかれた説明は少なくない。アウグスティヌスにおける *gaudium* の概念に聖書の影響は大きい。幸福とよろこび (*gaudere, gaudium*) を関係づける議論は、カッシキアム諸著作 (386年に著された4作) ではなされていない。神を「享受する (*perfrui*)」こととして幸福な生が論じられてはいるが、誰もが経験するよろこびと幸福な生におけるよろこびが積極的に関係づけて考えられているのではない。*gaudere* と関係づけて論じられるようになるのは、カッシキアムにおける生活からほぼ1年後に執筆が開始された『自由意志について (*De libero*

では、人それぞれ何をよろこぶかが異なるとすれば、いかなる生が幸福な生であるかもそれぞれ別であり、共通しているのは、各人にとってよろこびであるという限りなのであろうか。そうではないと思われる。先の引用において、われわれがよろこびを思い出すとき、ときには軽蔑をもって、またときには憧れをもってそれを思い出すと言われていた。いかなることによろこびを見出すかは、人によって異なるばかりでなく、個人においても変化するものであることにアウグスティヌスは気づいている。かつては兵士になることによろこびを見出し、それを望んでも、後にそれによろこびを見出さず、嫌悪を抱くことさえある。しかしわれわれが望んでいる幸福な生はそのような変化を許容するものではない。後によろこびでなくなることがないよろこびが見出されるのが、幸福な生であると考えられているからこそ、人生のあるときによろこびを経験をしても、未だ幸福な生を生きているとはみなされないのである。われわれは、幸福な生におけるよろこびと、日ごろ経験されるよろこびが、どのように関係しているかを問わなければならない。

たとえそれ（よろこび）を人それぞれ別のところに追い求めるとしても、すべての人がそこにたどり着こうと努力していることは、よろこぶというただ一つのことです。それは、経験したことがないと誰も言えないものなので、幸福な生という名前が聞かれるとき、記憶の中に見出され、認識されます。(X, 21, 31)

arbitrio)』以降である。(Cf.「こうした善に到達して生じるよろこびこそが、落ち着いて静かに絶えることなく心を奮い立たせるとき、幸福な生と言われるのです。真であり確実な善においてよろこぶことこそが、幸福に生きることであると君が思うのならば。」(*De lib. arb.* I, 13, 29)) カッシキアムを離れ『自由意志について』の執筆が始まるまでの間に、アウグスティヌスは受洗し、直後に母の死を経験している。

「幸福な生」という言葉を聞いて本来認識されるべきは、その言葉が指し示している幸福な生そのものであるといえよう。しかしわれわれはそれを未だ経験したことがなく、認識することはできない。とはいえ何も認識できないのではなく、その言葉を聞いて、経験したことがあるよろこびを認識するとアウグスティヌスは説明している。経験したことがあると言われているのであるから、ここで認識されるのは、幸福な生におけるよろこびではなく、人がそれぞれさまざまなことについてよろこぶよろこびである。すなわち、各人のよろこびの記憶が、幸福な生の記憶であるとみなされているのである。経験したよろこびの記憶が、幸福な生についてわれわれがもっている知であるということは、それはちょうどコインを探すときに手がかりとなる、失くしたコインについての知のようなものであるといえよう。アウグスティヌスは、誰もが経験したことのあつたよろこびが、幸福な生を愛し、その生に至ろうと探し求め、見出したときにはそれと分かるための手がかりであると考えていると思われる。しかし、人はそれぞれ、悪事をはたらいてよろこぶこともあれば、身体的な欲望を満たすことによってよろこぶこともある。いかなる考えにおいて、そうしたよろこびさえ、幸福な生を探し求め、見出すための手がかりとなるとみなされているのであろうか。

II よろこびの経験

『告白』において、幸福とよろこびを関係づけるアウグスティヌスの理解は、明示的な仕方ではないが、すでに第I巻において見られる。

もし理解しない人がいても、私がこたえるべきことではありません。そうした人も、「これは何であるか」と言ってよろこんでほしい。理解しなくてもよろこんで、見出すことによってあなたを見出さないよりもむしろ、見出さないことによってあなたを見出すこと

を愛してほしい。(I, 6, 10)

神がいかなる者であるかについてのアウグスティヌスの議論に引き続いて、このように言われている。「これは何であるか (quid est hoc)」は、神が天から与えたものを見て、イスラエルの人々がそれが何であるかを知らなかったためにそう言ったという「出エジプト記」16, 15の言葉が念頭にある。「これは何であるか」という人々の問いに対してモーセは、「それは主があなたがたが食べるために与えたパンである」と答えている。すなわち、何であるかを理解しなくても、神から与えられたものを糧として受け取るのがよいと言われていると解釈でき、アウグスティヌスも、何であるかを理解しなくてもそのまま受け取り、神を愛し求め続けることがよいと述べているのである。また、真理を探究する人はたとえ真理を発見していなくても幸福であるという考えは、すでに『アカデミア派論駁』においてキケロの考えとして紹介されている⁷。神ないし真理を理解することに至らなくても、そこに至ろうと探究することに幸福があるとの考えが、上の言明では、問いながらよろこぶと表現されているのである。生の究極の目的である幸福な生におけるよろこびではなく、そうした生を求めることにおいて生じるよろこびに、目的に至るための積極的な意義が見出されていることが分かる。

なぜ、探究することそのものによろこびが見出せると考えられているのであろうか。聖書の例では、イスラエルの人々はそれが何であるかを理解しなくても、与えられた糧を味わい、生きのびることによろこびがあろう。彼らはこの糧が与えられなければ、何であるかと問うことさえできなかったはずである。おそらくアウグスティヌスは聖書のこのエピソードを念頭において、何であるかと問うことができること自体が、人に、神を見

⁷ *Cont. Acad.* I, 3, 7 “Placuit enim Ciceroni nostro, beatum esse qui veritatem investigat, etiamsi ad eius inventionem non valeat pervenire.”

出すための糧が与えられていることを示していると考えているのではないであろうか。そのため、問いながらよろこんでほしいと述べていると思われる。しかし、「よろこんでほしい」という言い方に表れているように、たとえよろこぶべきことであるとしても、誰もがよろこびの感情を抱くのではない。感情は、命令されたところでその感情をいただくとは限らないものである。じっさいアウグスティヌスも、自らが若い時代にはいくつかの宗教や学派の間で揺れ動き、「真実を見出すことに絶望していた」(Conf. VI, 1, 1)と告白している。彼自身、現在はよろこぶべきとみなしていることがらをかつてはよろこんでいなかったという自覚をもっているのである。そうした自覚をもって、『告白』第I巻から第IX巻において自らの過去を語っているのであるから、われわれは、彼自身のよろこびの経験についての記述から、誰もが経験したことのあつたよろこびの記憶が幸福な生の記憶であるとする、第X巻の主張の意図を考察しようと思われる。

アウグスティヌス自身のよろこびの経験について語られている次の記述に注目しよう。アンブロシウスの説教を通して自らの間違いを知ったときのことが言われている。

霊的実体がいかなる仕方で在るのか、たしかに私は、あいまいな仕方で、たとえ比喩においても考えられずにいました。けれども私は、よろこびながら恥じ入りました。自分がこんなに長年、カトリックの信仰に對抗して吠え立てていたのではなく、肉の認識の虚構に対して吠え立てていたことをです。(VI, 3, 4)

長年、「カトリックの信仰について、それは非難するマニ教徒たちに何も言えないと思っていた」(V, 14, 24)アウグスティヌスであるが、マニ教徒として自分が非難していたカトリックの信仰は、じっさいのカトリックの信仰ではなく、勝手に作り上げたものであったことを自覚したのであ

る。霊的実体についての理解のみならず、旧約聖書の読み方についても、自分が間違った見方をしていたこと知り、「よろこんだ」と述べている (VI, 4, 6)。自分が誤解し、その誤解に基づいて行為したことに気づいたとき、恥じ入る気持ちをいただくのは自然であろう。しかし同時によろこんだのはなぜであろうか。まだ、霊的実体は何であるかの理解に至ったわけでもなく、ただ、自分の間違いに気づいた限りである。敬虔なカトリック教徒である母親のもとで、幼少時より身近であった信仰に対するシンパシーが、よろこびの理由であるとも考えられよう。しかしアウグスティヌスの関心は、どちらの信仰に軍配をあげるかにあったのではないと思われる。彼がカトリックの信仰を非難していたのはマニ教の教えに固執するためではなく、真理を愛するためではなかったか。彼が、真理について語っているかにみえたマニ教に入り込んだのは、キケロの『ホルテンシウス』を読んで「知恵への愛」に燃え上がったというすぐ後のことである⁸。マニ教の儀式に参加しながらも自分は真理に「飢え、渴いていた」(III, 6, 10) と述べていることから、当時彼が自覚的に真理を愛し求めていたことは明らかである⁹。したがって、真理を知りたいと望むアウグスティヌスにとって、自分の間違いに気づくことは、真実を知り真理に近づくことを意味したと思われる。自らの望みと自らのあり方が一致しているところに彼はよろこびを得たと解釈することができよう。

この経験以前にも、よろこびの経験についての記述はある。しかし当時の状態については、みじめであったと繰り返し述べられ、「よろこびを失っていた」(IV, 5, 10) と説明されている¹⁰。そしてそれらの経験について、*gaudere*, *gaudium* の語は使われず、*laetari*, *laetitia* の語が用いら

⁸ III, 4, 7; Cf. 本稿注 1

⁹ じっさい第 X 巻ではマニ教徒たちを念頭において、自分たちが間違っていることを説得されたがらない者たちであると非難している。

¹⁰ 「私のよろこびのなんと遅いことか (*o tardum gaudium meum*)」(II, 2, 2) という表現もなされている。

れている。たとえば、友人と盗みをしたときには「不正を享受してよろこんでいました」(II, 6, 12) と告白している。また、思春期に故郷を離れてカルタゴへ来て、情欲を満たすことに専心していたことについても、「悲惨な結びつきによろこんで縛られていた」(III, 1, 1) と述べている。gaudere と laetari に、概念上の明確な区別がされているとは思われないが¹¹、自らの間違いに気づいたよろこびと、「よろこびを失っていた」頃のよろこびに、何らかの違いがみとめられていることは推測できる。それがいかなる違いであるか、さらに別のよろこびについての記述を検討しよう。

自らの間違いに気づく経験に続いて述べられているのは、通りで見かけた、酔って楽しそうにしている乞食のよろこびと、当時の自分が求めているよろこびの比較である。

じっさい彼(乞食)は本当のよろこび(gaudium)を得ていたのではありません。しかし私も、あのような諸々の野心によってもっと偽りのよろこびを求めていたのです。たしかに彼はよろこんでいました(laetari)¹²が、私は悩んでおり、彼は安心していましたが、私は落ち着かずにいました。(VI, 6, 9)

乞食を見かけたのは、ちょうどアウグスティヌスが皇帝にうそで満ちた賛辞を朗読する準備をしていた日であった。当時のアウグスティヌスは、うそをつく自分のことを、うそと分かっているが好いてくれる人々に気

¹¹ たとえば、人間のもつ諸感情について説明する議論では、laetitia と gaudium は区別して使われているように見えない。(Cf. X, 14, 21-22); Cf. 本稿注 12

¹² ここでは、乞食もよろこぶべきことをよろこんでいるのではないから、gaudere ではなく laetari の語が用いられていると考えられるが、明確な区別ではない。

に入られることに、よろこびを求めていた¹³。しかし求めながらもよろこびを得ずむしろ悩んでいたと述べられている。そうした彼に対し、乞食はたしかによろこんでいた。また、乞食は酔うことによってよろこんでいたので、虚構を求めてよろこんでいるのは酔いがさめるまでの間であるが、アウグスティヌスはさめることのない仕方で、うそを作り出し虚構においてよろこぼうとしていた¹⁴。かくして自分より乞食のほうが幸せであるとアウグスティヌスは判断しているのである。

乞食のほうが幸せであるという判断において、安心してよろこぶあり方が評価されていることに注目しよう。乞食も酒がなくなればまたあらたによろこびを求めなければならず、常に安心していられるのではないが、少なくとも酒が手元にある間は安心してよろこんでいられる。しかし、人々に好かれることによろこびを見出そうとするときには、安心してよろこぶことが難しいと思われる。人の心はこちらの期待どおりのあり方をすると限らないものであるから、嫌われないためにいつまでも求め続けなければならない、安心がない。好かれるために嘘をついて相手に好かれたところで、それは真実をよろこびたい気持ちに反するため、満たされた仕方でよろこぶことができない。おそらく、かつて友人とともに盗みをはたいたり、情欲を満たすことに感じていたよろこびも、満たされることのないよろこびであったとアウグスティヌスは自覚しているのではないであろうか。そうした、不安と隣り合わせのよろこびに対して、自分の間違いに気づくよろこびは、不安やみじめさをともなうよろこびではないと思われる。真理が何であるかを知っているのではないから、自分が下した真偽の判断に保証が得られるのではないが、たとえ後に、かつて判断していたこ

¹³ 「私は自分のほうがより学識があるからといって、自分を彼（乞食）より優れているものとするべきではありませんでした。というのも、私は学識があることからよろこんでいたのではなく、人々に好かれることを求めていたからです。」(VI, 6, 9)

¹⁴ Cf. VI, 6, 10

とがらが間違いであったと自覚するとしても、その自覚はかつての判断が土台となって生じたのであるから無駄ではない。自分について自覚することから得られるよろこびに、他人の目の中に自分を探すことから得られない満たされた感情を経験したことから、『告白』では、その経験以前のよろこびはみじめなものとして描かれ、自分の間違いに気づいたことはたしかによりこんだこととして描かれているいると考えられる。

かくしてアウグスティヌスは、よろこびに、より満たされたよろこびとそうではないよろこびの違いをみとめていたといえよう。誰もが求める幸福な生におけるよろこびは充足したよろこびであるから、人がより満たされたよろこびを経験することは、より幸福な生に近づいたあり方を自覚することになる。そして、満たされないよろこびとくらべてそれを避けようとするにもなりうる。しかし、充足したよろこびを求めても、誰もがただちにそうしたよろこびを得られるわけではない。アウグスティヌスも、満たされなさを分かっているながら、人に好かれることによりこびを求めることをなかなか捨てきれないでいた。より満たされたよろこびを求め、且つじっさいによりこぶことは、いかにして実現されるのであろうか。

III 変化と経験

アンブロシウスの説教を通して自らの間違いに気づくことから得たよろこびについての記述に先立ち、アンブロシウスの抱いているよろこびについても語られている。彼と面会したいと望んでいたアウグスティヌスであるが、願いは叶わず、遠目にその様子を見たり、説教を聞く限りの関係であった。このような関係においてアンブロシウスを観察して、次のように述べている。

彼がいかなる希望を抱いていたか、彼自身のすぐれた誘惑に対抗し

て、彼がいかなる葛藤をもっているか、あるいは対抗者たちの中でいかなる安らぎをもっているか、そして心の中にある彼の隠れた口が、あなたのパンからどれほど美味しいよろこびをかみしめているかを、私は推測することもできず、経験もしていませんでした。

(VI, 3, 3)

当初アウグスティヌスは、世俗的な判断にしたがって、アンブロシウスは有力者たちに讃えられるなどして「幸せな人 (felix)」であるとみなしていた。幸せが名誉など自分以外の人やものから与えられるものであれば、その名誉を得ていない人によっても、他人の幸せを判断することができよう。それに対して心が満たされることにおけるよろこびは、誰でも傍から見て判断できるというものではない¹⁵。上述のように、アンブロシウスを観察していた当時のアウグスティヌスは、推測することもできなかったと告白している。推測できないのは、他人の心の内は見ることができないためというよりもむしろ、彼自身述べているように、相手の抱いているよろこびを経験したことがないためといえる。後に経験を経て、より推測できるようになったであろう『告白』執筆時のアウグスティヌスが、アンブロシウスの抱いているよろこびについて、「あなたのパンから」と表現していることに注目しよう。われわれはよろこぶとき、何かをよろこぶ。アンブロシウスのよろこびは、「あなたのパン」に由来するよろこびであったと説明されているのである。「あなたのパン」とは、本稿Ⅱで示した聖書の言葉にもあるように、神から与えられた味わうべき糧である。アンブロシウスと同様に、この神から与えられた糧をよろこぶ者は、同じよろこびないし似たよろこびを自らの心の内に経験しているのであるから、アンブロシウスの心中のよろこびを推測することができたであろうし、そ

¹⁵ 「われわれは幸福な生を、いかなる身体感覚によっても、他人の内に経験することはできない」(X, 21, 30)

れは共感しているといえるであろう。アウグスティヌスは、よろこびを経験したことがあっても、この神から与えられた糧をよろこんだことがなかったために、当時は推測できなかったと思われる。そしてこの神から与えられた糧は、本稿Ⅱで確認したように、われわれがそれによって生き、神を探究することができる手立てであるから、アンブロシウスの抱いていたよろこびは、神を探究するよろこびであるといえよう。

たしかに、アウグスティヌスも長年真理を探究していた。しかしその探究はアンブロシウスが抱いていたようなよろこびをともなうものではなかったのである。かつては、みじめさとともにあるよろこびをよろこび、アンブロシウスの説教を聞くようになった当時も、野心によって人に好かれることによるこびを求めようとしながら、よろこぶことができないでいた。そのような状態にあったアウグスティヌスが、『告白』執筆時に至っては当時のアンブロシウスのよろこびが推測できるほどに変化したのはいかにしてであろうか。「経験する」ということに注目して考えてみよう。アンブロシウスと同じ職業に就いて同じ状況下に置かれるならば、かならずアンブロシウスと同じよろこびをよろこぶというのではないであろう。そのよろこびを経験するときには、当人がそのよろこびをよろこぶあり方をしているということである。アウグスティヌスが自分の間違いに気づいたときによろこんだのも、そこによろこびを見出すあり方をそのとき有していたからである。その背景には、先に述べたように、読書や人々との交流を通して強くされた、真理を知りたいという意欲があったであろうし、マニ教徒の司教であるファウストゥスへの不信もあったであろう。長年のみじめなよろこびから離れ難くも、それを嫌悪し、より満たされたよろこびをよろこびたいという思いもあったであろう。人がある時点においていさぐ感情は、その時点までの諸々の内的経験と切り離されたものではない。それまでの諸々の内的経験の寄せ集めでもなく、それらを背景としてあらたな一つの内的経験としていだかれることが、その時点での感情であ

る。こうした仕方では、幸福な生ないし神を探求しながら、諸々の経験を通して変化ないし成長していくことが、かつてはよろこぶことができなかったことがらをよろこぶことを実現すると思われる。アウグスティヌスが神を探求していた点でアンブロシウスと共通していても、彼のよろこびをよろこぶことができなかったのは、この成長の差である。

おそらくアウグスティヌスは、自身の、よろこびたくてもよろこぶことができないという経験や、かつては分からなかった他人のよろこびが分かるようになるという経験を通して、よろこびの変化に幸福な生を目指す人間の成長を見てとったのではないであろうか。このように考えることによって、幸福な生の記憶は、誰もが経験したことのあるよろこびの記憶であるとする第 X 巻における主張の意図も理解される。すなわち、よろこびの経験の記憶は、かつて自分がいかなることがらをよろこんだかの記憶であって、各記憶については、思い出して嬉しかったり嫌悪したり其々であるが、それらよろこびの記憶全体は、自らのよろこびの変化、成長を示すものである。より満たされたよろこびをよろこぶことを目指して変化する、われわれのその時々のあるあり方をあらわすものがこのよろこびの記憶であるから、幸福な生において充足したよろこぶときにも、それをよろこぶあり方をあらわすのはこの同じよろこびの記憶であるといえよう。かくして、われわれの経験したよろこびの記憶が幸福な生の記憶でもあるとみなされているのであると考えられる。たとえよろこぶべきでないことがらについてよろこんだ記憶であっても、経験を経てより満たされたよろこびをよろこぶときには、幸福な生へ向かうその人の成長の糧となるのではないか。

では、まだ幸福な生を生きているのではないわれわれの探求において、より満たされたよろこびはいかなる仕方では実現されるのであろうか。いったい何をよろこぶことがより満たされたよろこびをもたらすのか。アウグスティヌスは第 VIII 巻において、ウィクトリヌスの回心について次のよ

うに言う。

じっさい、多くの人々とともによろこばれるときには、それぞれのよろこびはより満ちたものとなります。なぜなら、人々は熱くし合い、互いに燃え上がらされるからです。しかも、多くの人々に知られている人たちは、多くの人々にとって救いのための権威であり、つき従う多くの人々より先にいますので、そのために、彼らより前に行く人々も、彼らについてよろこばしく思うのです。なぜなら、彼らについてだけよろこんでいるのではないからです。(VIII, 4, 9)

ウィクトリヌスの影響は大きく、彼の回心をよろこび、それにならって回心する者も多い。そして彼とともに多くの人々が回心することから、先に回心している人々もそれをよろこぶと言われている。自分一人ではよろこぶのではなく、他の人々とともによろこぶことにおいてよろこびがより満ちたもの (uberius) となることは、われわれに、経験的事実としても知られることである。さらに、ウィクトリヌスは救いのための権威であると言われているが、この場合の権威とは、信用されている人であるということと解釈できよう。彼のすることなら信用し、安心してともによろこぼうと思える関係によって、他人の幸せをより満ちた仕方ではよろこぶことが成り立つと思われる。かくして、幸福な生を探究するときには、自分一人がその生に生きることを目指すのではそこに至ることができない。知性によってのみ神を見出すことが可能になるという考えとの違いはここにある。自らのよろこびのみならず、他の人と互いに信用を得て、ともによろこぶというあり方は、幸福な生を目指す道のりにおいてはより成長したあり方であると考えられているのである。『告白』においてアウグスティヌスが、学知があるのではない自らの母を、アウグスティヌスについてよろこぶべきときにはともによろこび、悲しむべきときには悲しんでくれた存在とし

よろこびの経験

て繰り返し描いていることも、よろこびに、幸福に生きるために変化し成長しようとするわれわれ人間の根源的なあり方をみているからではないであらうか。